

幼児期の運動発達に対する大学教育者チームと保育園の協力体制について（第2報）

上岡 尚代¹⁾, 橋本 和幸²⁾, 宮島 恵樹³⁾

了徳寺大学・健康科学部整復医療・トレーナー学科¹⁾

了徳寺大学・教養部²⁾

社会医療法人健和会病院³⁾

要旨

本研究は、保育園と、園児の運動発達についての研究及び実践のための教育学、心理学、スポーツ健康科学、理学療法などの大学教育者による研究チームとの協力体制の試みについて報告する。昨年度実施した第1報の研究に続き、本稿では保育園5歳児クラス（第1報における4歳児クラス）に対して、体格、運動能力の評価および保育園スタッフへの聞き取り調査を行い、介入すべき点を検討することを研究目的とした。調査内容は、園児の体格、運動能力、自由な遊び時間におけるからだを動かす遊びの頻度、遊び場所、遊びの様子、遊ぶ友達の人数とした。調査の結果、A保育園の5歳児の体格については、身長、体重とも全国平均値を上回っていたが、カウプ指数を統計学的にみると正常が41%、肥満が18%、やせが41%と、やせがみな体格の園児が半数近くを占めた。A保育園男子の運動能力は、文部科学省における調査報告書に記載の実践園と比較して、男子は捕球と足連続跳び越しの2種目において、女子は足連続跳び越し、体支持持続時間において実践園1年目の平均値を下回った。運動能力と聞き取り調査結果の関係は、自由な遊びのとき活発に身体を動かす遊びの頻度が高いものほど両足連続跳び越しと体支持時間の評定が高く運動経験の量により影響を受けることが示唆された。また、園児のカウプ指数と運動能力測定結果では、立ち幅跳びの結果のみやせ気味の群が正常の群より有意に高値を示し幼児期の運動能力は筋力発揮を要する種目においては体重の影響を受けることが示唆された。A保育園に対して、運動能力の課題である多様な動きを含む遊びの経験を増やす必要性が示唆された。

キーワード：保育園児、運動発達、大学教育者チーム、協力体制

On the system of cooperation between University Educators and a Nursery School regarding early childhood motor development. (Follow-up report)

Naoyo Kamioka¹⁾, Kazuyuki Hashimoto²⁾, Shigeki Miyajima³⁾

Department of Judothrapy and Sports Medicine, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University¹⁾

Center for Liberal Arts Education, Ryotokuji University²⁾

Social medial corporation, Kenwakai Hospital³⁾

Abstract

This study follows the previously presented, "About a system of cooperation of the professional teams and nursery schools for early childhood motor development" which reported on an attempt at cooperation between a nursery school and a team of professionals from fields such as pedagogy, psychology, sports health science, physical therapy, etc. on research and implementation regarding childhood motor development. After conducting evaluations of the physical fitness of the 5-year-old class (4-year-olds in the first study) and interviews with nursery school staff, we were able to understand the physiques, physical fitness, frequency of opportunities to move their bodies during free play time, play areas, the nature of their play, and number of playmates. For each survey item, we showed the actual situation and causal relationships, and carried out research for the purpose of preparing basic materials for a study on intervention methods. In regard to physique, at Nursery School A, both height and weight were above the national average, but looking at the Kaup index individually, 41% were normal, 18% tending toward overweight, 41% tending toward underweight, and the underweight. The physical fitness, the boys at Nursery School A were above the national average in the 25m run, standing wide jump, ball throwing, and duration of body support, but below average in the two-footed continuous jump and ball catching. The girls were above average in the 25m run, standing wide jump, ball throwing, duration of body support, and ball catching, but below average in the two-footed continuous jump. It was suggested to necessary to increase the experience of their play which is a task of exercise capacity.

Keywords: nursery school for studying childhood, motor development, university educators, cooperative structure

I. はじめに

近年、核家族化の進行や女性の就労機会の増大により、出産しても保育所に子供を預けて就労を継続する女性の割合が高まっている。保育所とは、児童福祉法第39条の規定に基づき、保育に欠ける子どもの保育を行い、その健全な心身の発達を図ることを目的とする児童福祉施設で、保護者が働いているなどの理由によって家庭での保育に欠ける乳幼児を保育することを目的とする通所の施設である。保育所における保育は、養護と教育が一体となって展開される。ここでいう「養護」とは、子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わりであり、「教育」とは、子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助とされている¹⁾。保育所保育指針の改定に関する中間とりまとめにおいて、保育所保育も幼児教育の重要な一翼を担っていること等を踏まえ、卒園時まで育ててほしい姿を意識した保育内容や保育の計画・評価の在り方等について記載内容を充実させること、主体的な遊びを中心とした教育内容に関して、幼稚園、認定こども園との整合性を引き続き確保する必要性がある事があきらかにされている²⁾。保育園での一日の保育時間は原則8時間であり、最長11時間、延長12時間まで可能となっている事から、園児は夜の睡眠時間と通園時間以外の生活時間の大半を保育所で過ごすことになる。生涯にわたる人間形成の基礎を培う重要な時期に多くの時間を過ごす保育園において、園児の基礎的な運動能力を培う事は保育園の重要な責務でもある。このような背景から本研究は、保育園の依頼により教育学・心理学・スポーツ健康科学・理学療法・幼児教育などの各種大学教育者により幼児の心身の健全な育成に寄与するあらゆる要因に対し介入の基礎資料を作成するための試みを行っている。昨年度は、第一段階として園の運動遊び及び戸外遊び時間、家庭での運動遊びの状況、運動系習い事の状況

などと推定される運動量との比較から、現状の把握をすることを試みた結果、保育園での戸外遊び時間の過ごし方により推定総運動時間に差があり、運動遊びを行っていない園児へも運動時間の確保の必要性が示唆された。また、戸外遊びの様子は、集団遊びの方が推定総運動時間に繋がることから、他の園児と集団で行える運動遊びの提案が有効と考えられた³⁾。本年度は、園児の運動能力テストを実施し文部科学省における調査の実践園1年目の平均値と比較し現在の園児の運動能力の課題を明らかにし、どのような介入をすべきかを検討する目的で研究を行った。

Ⅱ. 方法

1. 対象

調査対象はA保育園4歳児クラス22名を対象とし、保育園担任保育士より情報を得た。

2. 方法

1) 体力測定

文部科学省が発表している体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告に採用されている幼児の運動能力調査の6項目を実施した⁴⁾。

- ①25m走：スタート姿勢はスタンディングとし、スタートラインから合図とともにゴールラインの30mの直線路を全力で走らせ25m地点の測定ラインを通過するまでの時間を計測した。2回のうち上位の記録を採用した。
- ②立ち幅跳び：両足踏み切りによる跳躍距離を2回計測し、上位の記録をcm単位で記録した。
- ③ボール投げ：硬式テニスボールを使用して投距離を測定した。計測は2回実施し上位の記録をcm単位で記録した。
- ④両足連続跳び越し：4m50cmの距離に10個の積み木を50cm間隔で置き、両足を揃えて失敗することなく、連続して跳び越した時間を1/10秒単位で記録した。
- ⑤体支持持続時間：平行棒の間に立ち左右の平行棒をにぎり、合図で両腕を伸ばし、足を床から離し何秒間維持できるかを測定した。記録は秒単位で測定した。
- ⑥捕球：直径約12～15cmのゴムボールを3m離れた位置から保育園スタッフが下手投げで投げ、1.7mの高さに設置した紐の上を通ったボールを園児がキャッチする。10球のうち何回キャッチできたか記録する。

2) 保育園担任保育士からの聞き取り調査

園児の運動遊びの実施状況について聞き取り調査を行った。聞き取り内容は、以下の4項目とし各園児について質問した。

- ①自由な遊びのとき、活発に身体を動かす遊びをどのくらいしていますか？
- ②自由な遊びのとき、屋内での遊びと戸外での遊びとどちらが多いですか？
- ③自由な身体を動かす遊びをしているとき、楽しそうですか？
- ④自由な遊びのとき、よく一緒に遊んでいた友達は何人くらいですか？

3. 解析

解析は、IBM SPSS Statistics 20.0を用いて統計処理を行った。

運動能力検査の結果は、文部科学省の「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」⁴⁾で用いられている方法で算出し、条件ごとにt検定を行って、群間の平均値を比較した。

4. 倫理的配慮

本研究は、了徳寺大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号2723）。調査対象者の保護者へ、保育園の「おたより」を利用して、研究の趣旨及び内容、プライバシーの保護について説明を行い、同意を得た。

Ⅲ. 結果

1. 園児の体格について

厚生労働省が平成22年に行った乳幼児身体発育調査との比較によると、男女とも昨年（4歳）と本年度（5歳）の全国平均身長、全国平均体重より高値を示した⁵⁾。幼児の発育状態の程度を表す指数であるカウプ指数は正常9名41%、肥満ぎみ4名18%、やせぎみ9名41%であった。

表1. 身長全国平均との比較 (cm)

		男児	女児
全国平均	4歳児	104.0	102.8
	5歳児	110.5	109.5
A保育園	4歳児	108.2	107.5
	5歳児	112.7	110.0

表2. 体重全国平均との比較 (kg)

		男児	女児
全国平均	4歳児	16.6	16.3
	5歳児	18.9	18.4
A保育園	4歳児	17.6	18.7
	5歳児	19.0	20.4

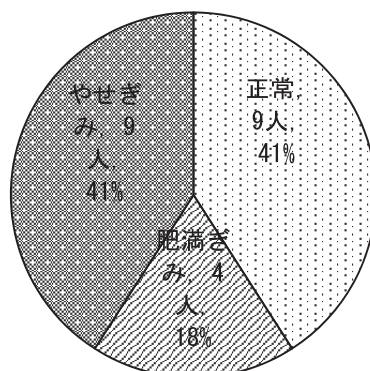


図1. カウプ指数の割合

2. 運動能力について

運動能力検査の結果は、文部科学省の「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」⁴⁾で用いられている方法で算出した。具体的には、園児がそれぞれの検査で出した成績を、同報告書の100-101頁の基準で1～5点の5段階得点に変換した。同報告書では、幼児期に取得しておくことが望ましい基本的な動作、生活習慣及び運動習慣を身に付けるための効果的な取組を行う幼稚園・保育園を「実践園」と定義して、実践園での運動能力検査の5段階得点の平均値を算出している(表3)。

表3. 実践園の運動能力検査の結果(N=3,059)

種目	実践園 1 年目
25m 走	2.90
立ち幅 跳び	2.95
ボール 投げ	3.05
両足連続 飛び越し	3.09
体支持 持続時間	2.94
捕球	3.27

表4. 運動能力検査結果(評定の平均)

種目	男子	女子
25m 走	3.1	3.1
立ち幅 跳び	3.3	3.7
ボール 投げ	3.0	3.3
足連続 跳び越し	1.5	1.4
体支持 持続時間	3.1	2.5
捕球	2.8	3.2

A 保育園の運動能力検査の5段階得点の平均値では表4および図2、3の通り男子は捕球と足連続跳び越しの2種目において実践園1年目の平均値を下回った。女子は足連続跳び越し、体支持持続時間において実践園の平均を下回った。

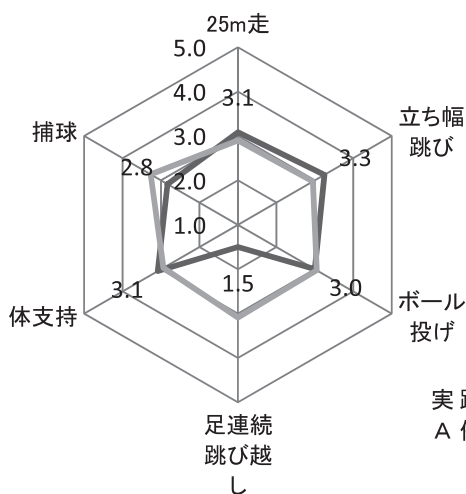


図2. 男子の運動能力(評定の平均)

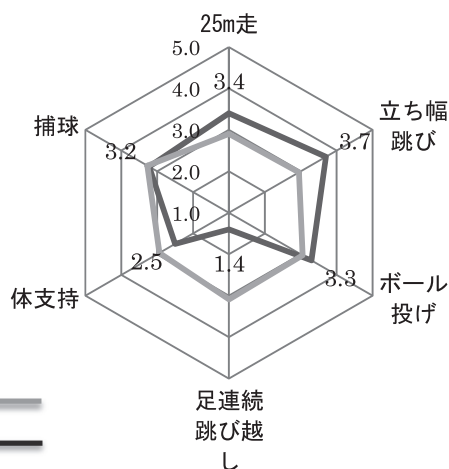


図3. 女子の運動能力(評定の平均)

文部科学省の報告書では、各検査の評定の合計点を算出し、総合判定基準(表5)に基づいてA,B,C,D,Eの5段階に分けている。この基準でA 保育園の園児を評定すると、個別の得点では、男子が総合判定最高点22点(評定4)、総合判定最低点10点(評定1)であり、女子が総合判定最高点24点(評定5)、総合判定最低点13点(評定2)であった。

表5 総合判定基準

段階	合計点
A	24～30点
B	20～23点
C	17～19点
D	13～16点
E	6～12点

3. スタッフからの聞き取り結果

1) 自由な遊びのとき活発に身体を動かす遊びをどのくらいしていますか?の質問に対し、1「非常によくする」、2「よくする」、3「少ししかしない」、4「まったくしない」の回答の割合は男子では図4の通り、「非常によくする」が75%、「よくする」が25%であった。女子では図5の通り「非常によくする」が10%、「よくする」が40%であったが、「少ししかしない」も50%であった。

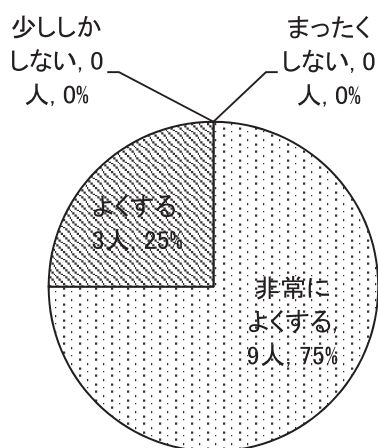


図4. 男子自由遊び中身体を動かす頻度

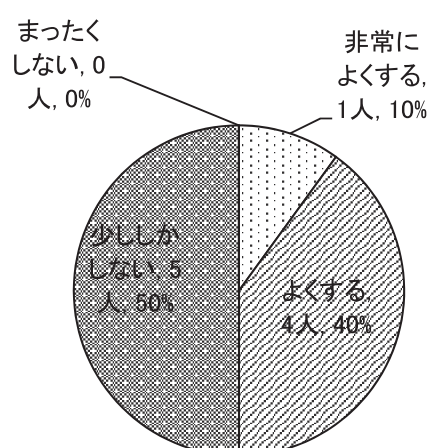


図5. 女子自由遊び中身体を動かす頻度

2) 自由な遊びのとき室内での遊びと、戸外での遊びとどちらが多いですか?の質問に対し、1「室内の遊びが非常に多い」、2「室内での遊びの方が少し多い」、3「どちらも同じくらい」、4「戸外での遊びの方が少し多い」、5「戸外での遊びが非常に多い」の五件法の回答は全員が3「どちらも同じくらい」の回答であった。

3) 自由な身体を動かす遊びをしているとき楽しそうですか?の質問に対し、1「楽しそうではなかった」、2「少し楽しそうだった」、3「かなり楽しそうだった」、4「非常に楽しそうだった」の四件法の回答は、男子では75%が「非常に楽しそうだった」、25%が「かなり楽しそうだった」との回答で、女子は「非常に楽しそうだった」の回答は10%にとどまり、「かなり楽しそうだった」、「少し楽しそうだった」の回答が大半を占めた。

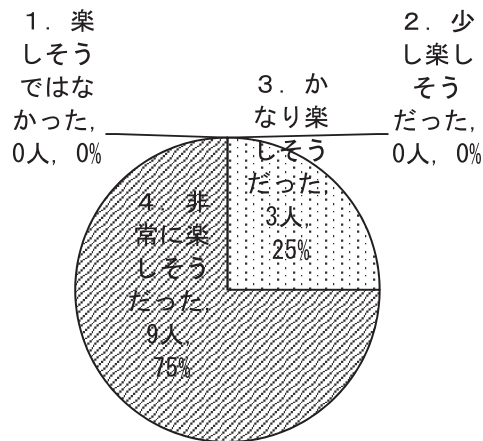


図6. 男子身体を動かす遊びの時の様子

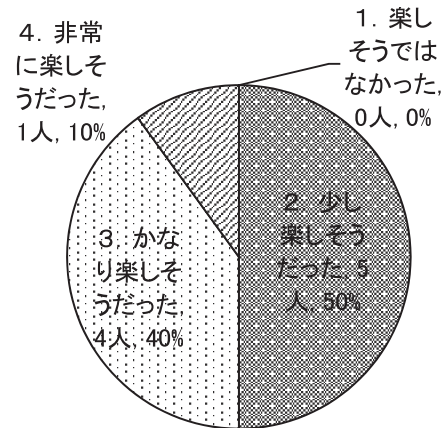


図7. 女子身体を動かす遊びの時の様子

4)「自由な遊びのときよく一緒に遊んでいた友達は何人くらいですか?」の質問に対し、1「1人で遊ぶことが多い」、2「2～3人」、3「4～5人」、4「6人以上」の四件法の回答は、図5. 6の通り男子が多人数で遊ぶ割合が多かった。

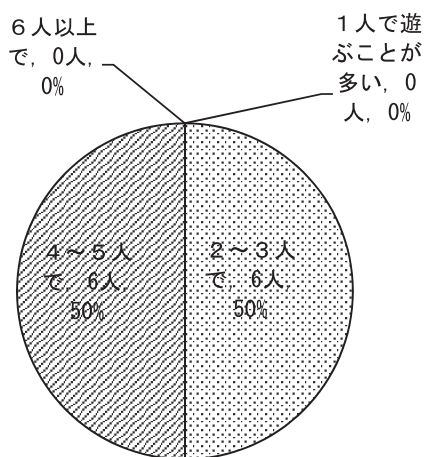


図8. 男子の一緒に遊ぶ人数

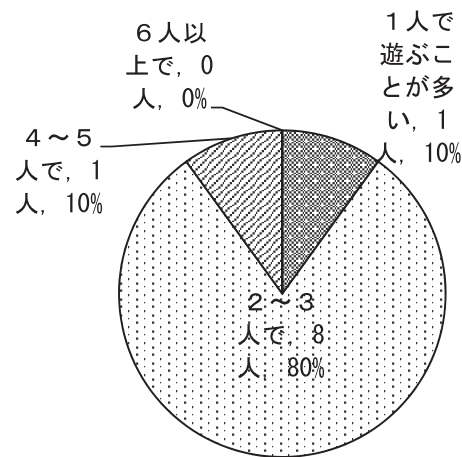


図9. 女子の一緒に遊ぶ人数

4. 身体を動かす遊びの経験と運動能力

「2. 運動能力について」で算出したA保育園の運動能力検査の平均値が、「自由な遊びのとき活発に身体を動かす遊びをどのくらいしていますか?」の質問に対し、1「非常によくする」、2「よくする」、3「少ししかしない」、4「まったくしない」の回答のうち、1. 2の解答を「高頻度：1」3. 4の解答を「低頻度：0」とした場合、各群間で運動能力測定結果に差があるかについて対応のないt検定で検討した。結果は、両足連続跳びこしと体支持時間において、高頻度な群が有意に高値を示した。

表6. 身体を動かす遊びの経験と運動能力

種目	群	人数	平均値
25m 走 評定	低頻度	8	3.0 ± 1.3
	高頻度	14	3.4 ± 0.8
立ち幅跳び 評定	低頻度	8	3.6 ± 0.7
	高頻度	14	3.4 ± 1.4
両足とび 評定	低頻度	8	1.1 ± 0.4
	高頻度	14	1.6 ± 0.6
体支持 評定	低頻度	8	2.3 ± 0.7
	高頻度	14	3.1 ± 0.8
捕球 評定	低頻度	7	2.9 ± 1.1
	高頻度	14	3.1 ± 0.6
総合 評定	低頻度	7	16.0 ± 2.6
	高頻度	14	17.6 ± 3.9

]*p<0.05

]*p<0.05

5. 身体を動かす遊びの経験と身長・体重の増加について

「2. 運動能力について」で算出したA保育園の運動能力検査の平均値は、「自由な遊びのとき活発に身体を動かす遊びをどのくらいしていますか？」の質問に対し、1「非常によくする」、2「よくする」、3「少ししかしない」、4「まったくしない」の回答のうち、1、2の解答を「高頻度:1」3、4の解答を「低頻度:0」とした場合、表7の通り両群間に身長、体重の増加について対応のないt検定で検討した。結果は、有意な差がみられなかった。

表7. 身体を動かす遊びの経験と身長・体重の増加

	群	人数	平均
身長	低頻度	7	3.9 ± 2.5
	高頻度	12	4.3 ± 3.7
体重	低頻度	7	2.6 ± 2.2
	高頻度	14	1.5 ± 0.9

6. カウプ指数と運動能力について

「2. 運動能力について」で算出したA保育園の運動能力検査の平均値は、園児のカウプ指数を「やせ気味:0」「正常:1」「肥満ぎみ:2」とした場合の、各群間の運動能力の差を運動能力測定項目別に一元配置の分散分析で解析した結果、表8の通り、立ち幅跳びの結果のみ、やせ気味の群が正常の群より有意に高値を示した。

表 8. カウプ指数と運動能力

種目	群	人数	平均値
25m 走 評定	やせぎみ	9	3.4 ± 1.2
	正常	9	3.0 ± 0.9
	肥満ぎみ	4	3.3 ± 1.0
立ち幅跳び評定	やせぎみ	9	4.3 ± 0.7
	正常	9	2.6 ± 1.1
	肥満ぎみ	4	3.5 ± 0.6
ボール投げ評定	やせぎみ	9	3.3 ± 1.2
	正常	9	2.7 ± 1.0
	肥満ぎみ	4	3.8 ± 1.5
両足とび評定	やせぎみ	9	1.6 ± 0.7
	正常	9	1.4 ± 0.5
	肥満ぎみ	4	1.3 ± 0.5
体支持評定	やせぎみ	9	3.0 ± 1.0
	正常	9	2.9 ± 0.8
	肥満ぎみ	4	2.3 ± 0.5
捕球評定	やせぎみ	9	2.9 ± 1.0
	正常	9	2.9 ± 0.6
	肥満ぎみ	3	3.7 ± 0.6
総合評定	やせぎみ	9	18.6 ± 3.8
	正常	9	15.4 ± 3.3
	肥満ぎみ	3	17.7 ± 0.6

]**p<0.01

7. 運動能力と遊ぶ友達の人数

「2. 運動能力について」で算出したA保育園の運動能力検査の平均値は、「自由な遊びの時によく一緒に遊んでいた友達の人数」について、「4人以上」= 1, 「2～3人以下」= 0とした場合, 多人数で遊んでいる群と少人数で遊んでいる群の間に運動能力の差があるかについて対応のないt検定で検討した。結果は, 表9の通り, 両群間の運動能力に有意な差はみられなかった。

表 9. 運動能力と遊ぶ友達の人数

種目	群	人数	平均値
25m 走 評定	少人数	15	3.1±1.0
	多人数	7	3.6±1.0
立ち幅跳び 評定	少人数	15	3.4±1.1
	多人数	7	3.6±1.5
ボール投げ 評定	少人数	15	3.2±1.2
	多人数	7	3.0±1.3
両足とび 評定	少人数	15	1.3±0.5
	多人数	7	1.7±0.8
体支持 評定	少人数	15	2.7±0.9
	多人数	7	3.0±0.8
捕球 評定	少人数	14	2.9±0.8
	多人数	7	3.1±0.7
総合 評定	少人数	14	16.6±2.8
	多人数	7	18.0±4.8

IV. 考察

昨年度「幼児期の運動発達に対する専門職チームと保育園の協力体制について」として園児の運動発達についての研究及び実践のための教育学、心理学、スポーツ健康科学、理学療法などの専門職のチームと保育園の協力体制の試みについて報告した。昨年度は、第一段階として園の運動遊び及び戸外遊び時間、家庭での運動遊びの状況、運動系習い事の状況などと推定される運動量との比較から、現状の把握をすることを試みた結果、保育園での戸外遊び時間の過ごし方により推定総運動時間に差があり、運動遊びを行っていない園児へも運動時間の確保の必要性が示唆された。また、戸外遊びの様子は、集団遊びの方が推定総運動時間に繋がることから、他の園児と集団で行える運動遊びの提案が有効と考えられた³⁾。本年度は、研究の第二弾の試みとして、園児の運動能力テストを実施し文部科学省による調査報告書の実践園1年目の平均値と比較し現在の園児の運動能力のどの要素が優れているか、劣っているかについて明らかにし、どのような要素の含まれる運動遊びを提案すべきか検討する事を目的に行った。

園児の体格については、は男女別に全国平均値が異なることから男女別に検討した。厚生労働省が平成22年に行った乳幼児身体発育調査との比較によると、男女とも昨年（4歳）と本年度（5歳）の全国平均身長、全国平均体重より高値を示した⁵⁾。乳幼児（3ヶ月～5歳）の発育状態の程度を表す指数にカウプ指数があり以下の式で表すことができる。カウプ指数＝体重（kg）÷身長（cm） 2×104 。本研究の対象者におけるカウプ指数は41%が正常であったが、18%が肥満ぎみ、41%がやせぎみであった。乳幼児期の体格は、出生時の体重、育児環境、栄養状態によっても影響を受けることが想定されるが、脳をはじめとして臓器の発育の著しいこの時期の成長の変化は幼児の健康に影響を与えている可能性もあることから、1回の評価結果だけではなく継続的に変化を追っていく必要がある。

運動能力については男女で評定が異なる為、測定数値ではなく評定点で検討した。平均値では、男子は

体支持時間、足連続跳び越しの2種目において全国平均を下回り、女子は足連続跳び越しのみ全国平均を下回った。個別の得点では、男子が総合判定最高点22点（評定4）、総合判定最低点10点（評定1）であり、女子が総合判定最高点24点（評定5）、総合判定最低点13点（評定2）であった。男女とも実践園1年目の平均値を下回っていた両足連続跳び越しの種目について、他の運動能力評価項目は、走る、投げる、拾う、跳ぶと言う日常の運動遊びの動作で経験可能な動作の能力であるが、両脚連続跳び越し動作は、連続した跳び越しが課題となっており、左右の下肢を協応させる能力（協応性）、タイミングや高さを調整しながらテンポよく障害物を跳び越える能力、着地後のバランスをコントロールする能力（動的な平衡性）といった他の要素を含む総合的な調整力についての評価指標となる可能性も考えられると高德も述べている。高德の動作分析においても、上位群と下位群では、滞空時間は変わらないものの着地動作が異なっており、着地時に股関節と膝を過屈曲させ深いしゃがみ込みになる下位群では次の動作までに遅れが生じてしまう事を指摘している⁶⁾。このような動的な調整力を培うプログラムとしては、蒲らの推奨する⁷⁾「ラダー遊び」や「片足ケンケン」「ケンパ、ケンケンパ」などのような左右の素早い重心移動を繰り返して前進するような種目や、繰り返しジャンプしながら縄を跳ぶ縄跳び遊びも有効な運動遊びであるとしている。今後の運動遊びの介入について、上記の要素を含んだ運動遊びの開発と指導が必要であることが示唆されたが、測定結果によって得られた個々の課題のみを介入すると経験の偏りを生んでしまう事にも配慮しなければならない。幼児期運動指針ガイドブック⁸⁾においても、現代の幼児は多様な動きを含む遊びの経験が少なくなっている事を指摘しているように、課題となった要素を含む、多様な動きを含む遊びの経験を増やす事を大枠の介入目的とすべきであるとも考えられた。

活発に身体を動かす頻度と運動能力については、自由な遊びのとき活発に身体を動かす遊びをどのくらいしていますか？の質問に対し、1「非常によくする」、2「よくする」、3「少ししかしない」、4「まったくしない」の回答のうち、1、2の解答を「高頻度：1」3、4の解答を「低頻度：0」とした場合、各群間で運動能力測定結果に差があるかについて解析を行った。結果は、両足連続跳びこしと体支持時間において、高頻度な群が有意に高値を示した。

カウプ指数と運動能力の関係については、立ち幅跳びの結果のみ、やせ気味の群が正常の群より有意に高値を示した。原崎の報告や久保らの報告によると、幼児の体型と運動能力調査体格の違いによる運動能力は有意な差がみられなかったと報告しているものの^{9,10)}、小野らは小学生を対象とした調査において、肥満型が非肥満型と比較し、持久力の測定（シャトルラン）で有意に劣る¹¹⁾、真家も小学生を対象とした調査で筋力発揮および投運動における上肢の瞬発力発揮は身長及び体重の発育の影響を受けるとともに、体重増によるローレル指数の増加は身体移動を伴う運動のパフォーマンスを低下させる要因となる事が示唆されたとしている¹²⁾。中野らは幼児を対象とした報告で、立ち幅跳びと体支持持続時間で痩せ傾向群と肥満傾向群との間に有意な差がみられたと報告している¹³⁾。

本研究で体格による差がみられた立ち幅跳び種目は全身パワーを評価する種目であるが、乳幼児期にはまだ筋肉の発達も乏しく、重い体重を移動させるより体重の軽い園児の方が有利であることから、やせ気味の群が正常の群より高値を示したのだと考えた。真家の報告と同じ傾向であり、幼児期の運動能力でも筋力発揮を要する種目においては体重の影響を受けることが示唆された。

本研究の限界としては、被験者が1保育園の5歳児クラスにとどまっている事から、4歳児クラスなど他の年齢群も対象に含め、他の園との比較を行うなど、更に被験者を増やして行う必要があった。また、園庭が狭いため持久力テストを実施できていない事から、シャトルラン実施に向けても検討したい。

V. まとめ

本研究は、「幼児期の運動発達に対する専門職チームと保育園の協力体制について」の第1報に続き、A保育園5歳児クラス（第1報における4歳児クラス）に対して、体格、運動能力の評価および保育園スタッフへの聞き取り調査を行い、介入すべき点を検討することを目的として研究を行った結果、以下の示唆が得られた。

1. A保育園園児の、運動能力の課題であるボールの捕球動作、連続ジャンプ動作、上肢による体支持を要する運動遊びの方法を提供し園児に体験させる必要性が示唆された。
2. 自由な遊びのとき活発に身体を動かす遊びの頻度が高いものほど両足連続跳び越しと体支持時間の評価が高く、2項目が運動経験の量に影響を受けることが示唆された。
3. カウプ指数と運動能力は、立ち幅跳びの結果のみやせ気味の群が正常の群より有意に高値を示し幼児期の運動能力は筋力発揮を要する種目においては体重の影響を受けることが示唆された。
4. 運動介入は、動的な調整力の要素を含んだ多様な動きを含む遊びの経験を増やす必要があった。
5. 対象とする年齢を広げ、被験者を増やして結果の信頼性を高める必要があった。

文献

- 1) 厚生労働省「保育所保育指針解説書」
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04b.pdf#search='%E4%BF%9D%E8%82%B2%E6%89%80%E3%81%A8%E3%81%AF+PDF'> (2016.11.28.20:35アクセス)
- 2) 厚生労働省「保育所保育指針の改定に関する中間とりまとめ」
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000132740.html> (2016.11.25.19:10アクセス)
- 3) 上岡尚代, 橋本和幸, 菅沼徳夫ら (2015) 幼児期の運動発達に対する専門職チームと保育園の協力体制について (第1報), 了徳寺大学研究紀要, 10,53-60.
- 4) 文部科学省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/youjiki/index.htm (2016.11.22 20:38アクセス)
- 5) 文部科学省「学校保健統計調査平成27年度学校保健統計調査による身体発育値及び発育曲線」
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001070662&cycode=0> (2016.11.26.23:00アクセス)
- 6) 高德望 (2012)「両足連続跳び越し」の動作分析からみた幼児期における調整力の重要性, 人間文化研究科年報 (奈良女子大学), 28, 79-87. 文部科学省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」
- 7) 蒲真理子, 佐野新一, 宮口和義ら (2003) 幼児期におけるアジリティラダーを使用した遊びの検討, 北陸大学紀要, 27, 13-23.
- 8) 文部科学省「幼児期運動指針ガイドブック」第2章幼児期における身体活動の課題と動の意義 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319772.htm (2017.1.18.13:00アクセス)
- 9) 原崎正司, 鈴木順和 (1990) 宮崎県の幼児の運動能力に関する調査—体格と運動能力の関係について—, 宮崎女子短期大学紀要, 16, 79-92.
- 10) 久保温子, 村田伸, 平尾文ら (2015) 幼児の体型が運動能力に及ぼす影響について, ヘルスプロモーション理学療法研究, Vol.5, No.2, 61-64
- 11) 小野くに子, 奥田豊子 (2008) 小学生の肥満状態と食生活・体力との関連性. 大阪教育大学紀要,

57, 1-10.

- 12) 中野貴博, 春日晃章, 村瀬智彦ら (2013) 幼児期の体格変化と生活時間および体力変化の 多角的関係性の検討 —3年間の追跡データを用いて—, 発育発達研究, 58, 34-42
- 13) 真家英俊 (2013) 小学生における体格と運動能力との関係に関する横断的調査, 東京未来大学研究紀要, vol 6, 153-163.

(平成28年12月1日稿)

査読終了日 平成29年1月27日